

## ベトナム近現代史における「伝統医学」

小田 なら

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

現在ベトナムでは、ベトナム由来の「南薬」と中医学由来の「北薬」が「伝統医学」の薬草治療として一つにまとめられ、公的医療制度内で利用されている。「南薬」の薬草と「北薬」の薬草との差異は極めて曖昧だが、長らく中国諸王朝からの侵略を受けていたベトナムでは、中華世界の事物に対して対等な関係性を求める動きの一つとして、14世紀ごろから次第に、ベトナム北部から「南薬」という概念・言葉が興ってきた。そして「南薬」は、仏領期と抗仏・抗米戦争を経てなお、ベトナムの独自性の象徴として認識されている。同時に、「建国の父」のホー・チ・ミンによる「われわれの薬「南薬」、北薬、東洋医薬を大いに利用しよう」との呼びかけによって伝統医学への権威付けがおこなわれ、北ベトナムの医療政策へ具現化していった点も、もう一つの重要な背景である。このような背景から、「南薬」やそれを含むベトナムの伝統医学は、常に対外敵ナショナリズムと関連づけて語られてきた。

「いかにベトナムの伝統医学が成立し、なぜ発展してきたのか」という問いには、外敵を想定したナショナリズム論や、政治目的のための「伝統の創造」論のみでは答えられない。財・物の不足により、身近な薬草に頼らざるを得なかった抗仏・抗米戦争期や1980年代の物資不足の時代に、それらを利用し、実用性を裏付けられたからこそ現在まで残るものとなったのである。

さらに、これまで看過されてきた視角は、南北に分断されていたベトナムを統合するための方便としての「伝統医学」という概念である。当時の医師団体発行の医学雑誌や民族誌より、元来ベトナム北部で誕生した「南薬」という概念は、ベトナム南部においてはほとんど浸透していなかったのではないかと考えられる。そのような地域を統合していく上で用いられるようになったのが、「ベトナム民族」の「民族医学」という呼称であり、これを理想として掲げるようになったのである。このように、ベトナムの公定の「伝統医学」は「民族医学」や「東医」「南薬」など、さまざまな概念を包摂しながら変容を遂げてきた。

「南薬」が誕生した当時は「南」対「北」という対立概念があったが、次にベトナムが西洋と対峙する中で、ベトナムの医薬界において「西」対「東」という概念が意識され始めた。さらに、抗仏・抗米戦争の時期にはこの概念はより意識され、医師や研究者らが戦場での必要性から国を挙げて国内に存在する薬草についての研究に取り組み、多くの成果をあげた。

南北にベトナムが分断されていたこの時期、ホー・チ・ミン率いる北ベトナムでは「南薬」と「北薬」を含む「東洋医学」を推進していたが、南ベトナムのサイゴン政権下では、「南薬」「北薬」という表現は当時の医師団体の雑誌にはみられない。また、南部に多く居住する華人の薬がよく利用されていたと述べている当時の民族誌と併せて考えると、「北薬」と、もともとベトナム北部で誕生した「南薬」という概念は、ベトナム南部においてはほとんど浸透していなかったのではないかと考えられる。そのような地域を統一し、ひとつの独立国家として統合していく際、必要となったのは南北両方の地域で共有でき、かつ「ベトナム」らしさを失わない呼称であった。ここで用いられるようになったのが、「民族医学」という呼称であった。ベトナム国家は、「民族医学」すなわちベトナムにおけるベトナム人によるベトナム人のための医学を理想として掲げ、それを実現するために諸制度を整備し、また、管理をおこなうようになったのである。また、この「民族医学」という新しい概念の設定は、対外敵ナショナリズムによるものというよりも、漢方薬が「伝統医学」として存在してきた南部を国民国家として独立した新生ベトナムに領域として組み込み、国民統合を促進していくための方便であったとも考えられる。